

南アルプス市立白根百田小学校自己評価書

令和7年1月30日(木)

1 自己評価の経過

- (1) 教職員自己評価、児童対象アンケート及び保護者アンケートの実施(12月)
- (2) 自己評価及びアンケート結果を基に職員会議及び学年会議にて状況分析と改善方策の検討(1月)
- (3) 学校関係者評価委員による自己評価書の検討(1月30日)

2 学校評価の分析と改善方策

はじめに

白根御勅使中学校区小中一貫教育推進のための取組として、学校評価においても質問項目を統一(中学校は一部)して行い、1中学校2小学校が足並みを揃えて目指す児童生徒像の実現に向けた取組を行っている。18の項目についてアンケートを行い、教育活動の継続的な改善を図るものとする。

[1] 評価基準

全体傾向を把握するため、【A】【B】評価を肯定的評価とし、それらの合計が80%を超えている場合は『満足できる状態』と判断した。また、【C】【D】評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は、『改善の余地がある状態』と判断した。

[2] 全体的な傾向

上記の評価基準からすると、教職員による自己評価では、18項目中17項目で【A】【B】評価の合計が90%以上の割合になっており、概ね良好な状況であることがわかる。しかし、否定的評価に目を向けると、学習指導に関する項目に改善の余地が見られる。特に、「⑬ICT機器を効果的に活用しながら、『友だちと関わりながら学び、高め合う子供の育成』を目指した授業づくりに努めている」という項目では、【A】評価の割合が比較的低く、【C】評価の回答が14%という結果が出ている。これらの結果を総合的に判断すると、さらなる改善が必要な点があると言える。

児童アンケートにおいて【A】【B】評価の合計が80%を超えている項目は、20項目中18項目あり、その内、13項目で90%以上の肯定的評価で、全体的には良好な結果が得られている。【C】【D】評価に焦点を当ててみると、「④じゅぎょう中、しつもんやいけんをよくいきますか」と「⑰いえのひとと、さいがいがおこったときのことを、はなしていますか」の2項目で20%を超えていて『改善の余地がある状態』であった。特に、④の質問項目については、【A】を回答している児童が31%と他の項目に比べかなり低く、授業への積極的な参加を促すための取組が求められる。

保護者アンケートの結果、21項目中13項目で肯定的な回答が多数見られた。しかし、「④お子さんは、授業中によく発言をしている」「⑰お子さんと、災害が起こった時の対応について話をしている」に関する質問では、否定的な回答が約40%と高く、児童のアンケート結果と一致する傾向が見られた。

[3] 結果の考察

(1) 御勅使中学校区小中一貫教育(1~3)

令和4年度、白根御勅使中学校区の小学校3校は、「白根御勅使中学校区小中一貫校」として新たなスタートを切った。それぞれの学校が特色をいかしながらも、小中一貫教育推進協議会を核として、小中一貫教育学校目標である「ふるさとを愛し、生きる力を備えた児童生徒の育成」の実現に向け、連携を深めながら取組を進めてきた。これまでの小中相互授業参観に加え、本年度は、授業でつながる

「確かな学力」についての各教科交流会を実施し、授業改善に繋げることができた。来年度より、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）がスタートする。地域とともにある学校づくりをさらに強化し、発展させていく。

（２）学校教育目標、経営方針・学校運営（４～１０）

教職員自己評価において、すべての項目で肯定的な評価が得られていることは、教職員が学校教育目標の実現に向けて一丸となっていることを示す好ましい結果である。特に、学校運営への参画度が高いことは、学校全体の活性化に繋がっていると考えられる。一方で、「⑤マネジメントサイクル（OODAループ）で、常に改善を図ろうとしている」項目において、【A】評価が48%にとどまっている点は、改善の余地があることを示唆している。令和の時代は、新学習指導要領の全面实施、働き方改革、GIGAスクール構想など、学校を取り巻く環境が大きく変化している。ICTを効果的に活用し、「全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」を実現する「令和の日本型学校教育」を推進していくためには、これまでの教育活動を見直し、新たな取り組みを積極的に進めていく必要がある。

また、学校教育目標に関わって、保護者アンケート「①お子さんは、学校に行くことを楽しみにしている」という質問について、89%が肯定的評価を回答した。児童アンケート「①がっこうがたのしいですか？」と同様な質問をしたところ、90%が肯定的評価を回答した。児童・保護者アンケートの結果は、多くの児童が学校生活を楽しんでいることを示しており、学校教育目標の中心にある「授業が楽しい、先生が大好き、授業がよくわかる、学校が大好き」というキーワードが、概ね実現されていると言える。しかしながら、10%の児童が学校生活に課題や不満を抱えているという事実も無視できない。学校生活に課題や不満を抱えている児童が学校生活を楽しむようになるためにも、具体的な取組を考えていく必要がある。

（３）学級経営・学習指導（１１～１４）

本校では、「友だちと関わりながら学び、高め合う子供の育成 ～自分の考えを創る 深める授業を目指して～」を校内研究のテーマとし、確かな学力の定着と学習指導の充実に向けて取り組んできた。特に本年度は、言語活動の充実に加え、子供たちのコミュニケーション能力が高まることで、自分や友達の価値に気づき、自尊感情を高めたり他者を尊重したりすることにもつながると考え、研究を進めてきた。このことは、今日的な教育課題の解決につながるだけでなく、安心して過ごせる学級づくり、楽しく通える学校づくり、そして、児童一人一人の「居場所づくり」に繋がっていると考えられる。

自己評価の結果を見ると、「⑪適切な児童理解に基づき、ルールとリレーションのある学級・学年づくりに努めている」については、【A】評価が過半数を超えている。一方、前述したように、「⑬ICT機器を効果的に活用しながら、『友だちと関わりながら学び、高め合う子供の育成』を目指した授業づくりに努めている」という項目では、【A】評価の割合が比較的低い。教職員は、多忙な業務を抱えながら、常に新しい教育方法やツールを学び続けることが求められている。しかし、ICT機器の急速な発展に対応するためには、より専門的な知識やスキルが必要であり、その習得に苦慮している現状がある。

児童アンケートの結果、「②がっこうのじゅぎょうがよくわかりますか？」の項目では、94%の児童が日々の学習内容を理解していると回答した。この結果は、「⑤家で、家庭学習をよくしていますか？」の項目との関連性が考えられ、「家庭学習のすすめ」や「家庭学習ふりかえりの日」などの取組が奏功していると考えられる。一方で、「④じゅぎょうちゅうに、しつもんやいけんをよくいいますか？」の児童アンケート結果と「④お子さんは授業中によく発言をしていますか？」の保護者アンケート結果で

は、【C】【D】評価がそれぞれ 36%、39%と高く、児童の積極的な発言が課題であることが明らかになった。ICTを活用した意見交換など、多様な「考えを伝える」方法を取り入れ、児童の学習を深める工夫が必要である。また、学習に不安を抱く児童・保護者もおり、より一層、指導力と授業力の向上に努め、すべての児童に楽しくわかる学びを提供していくことが重要である。今後とも、家庭学習を含め、学校と家庭の連携を強化し、児童の学力向上を図るとともに、Chromebook を活用した個別最適な学習の推進にも力を入れていく。

(4) 児童理解・生徒指導 (15~17)

生徒指導を充実させていくには、日頃から学級・学年経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係や児童相互の好ましい人間関係を育てることが大切である。自己評価では、3項目とも肯定的評価が100%であった。また、児童アンケートにおいても、「①がっこうが、たのしいですか？」(90%)、「⑦ともだちをたいせつにして、こまっていたらたすけていますか？」(98%)、「⑨じぶんからすすんで、あいさつをしていますか？」(87%)、「⑫こまったときに、せんせいは、はなしをきいたり、きちんとたいおうしてくれたりしますか？」(98%)、という肯定的評価であった。「豊かな心」をもった児童の育成について、地域ふれあい道徳授業を行い、学校と家庭や地域が連携して子供たちの豊かな心を育む教育活動を行っている。校外学習等で地域の伝統文化に触れることで、地域への愛着を育てている。また、児童会の取組や全校集会を通じて、あいさつの大切さを啓発している。毎日あいさつ運動を実施し、あいさつが自然に行われるよう、学校全体で取り組んでいる。小笠原流礼法の授業を通して、人を大切にする心や、礼儀作法の基本を学んでいる。運動会や合唱交流会、縦割り活動などの様々な学校行事を通して、他学年との交流を意図的に行っている。リーダーシップを発揮したり、仲間と協力して何かを成し遂げたりすることで、自己有用感や自己肯定感を育むことができたと考えている。一方で、「①がっこうが、たのしいですか？」の【C】【D】評価(10%)、「⑭じぶんには、よいところや、とくいなことがありますか？」の【C】【D】評価(10%)については真摯に受け止め、児童理解を深め、諸問題の早期発見・早期解決に努めていく。定期的に開催している「いじめ対策委員会」や「特別支援校内委員会」を有機的に連携させ、児童の様々な課題について、チーム百田小学校として全教職員が一丸となって指導・支援していく。

(5) 保護者・地域連携 (18)

本校では、学校教育が保護者や地域社会の理解と協力なしには成り立たないという認識のもと、様々な取組を行っている。まず、保護者や地域の方々との信頼関係を築くため、学校運営協議会やPTA役員会・学年部会などを通じて、学校の教育活動や運営に関する情報を積極的に共有している。また、学校だよりやホームページを活用し、より多くの方に学校の様子を知っていただくよう努めている。自己評価においても全ての教職員が、「⑱保護者・地域に対して誠実に関わり、保護者・地域及び関係機関との連携・協力体制の構築に努めている」に肯定的評価を示している。この意識は全教職員に共通している。さらに、PTA 早朝作業や運動会、校外学習など、学校行事の成功には、保護者や地域の方々の協力が不可欠である。交通安全指導など、地域住民の方々との連携も密に行っている。今後も、学校教育に対する保護者や地域社会の理解と参画を深め、共に子どもたちの成長を支えていきたいと考えている。社会に開かれた教育課程の充実を目指し、保護者、地域社会と連携・協働しながら、教育活動をさらに発展させていく。

おわりに

今、AI や IoT などの技術革新が社会構造を大きく変え、学校教育も新たな転換期を迎えている。学びの多様化と個別最適化に向け、AI 活用、オンライン学習の普及、家庭学習との連携強化を図る必要がある。体験学習の充実には、地域学習やボランティア活動など、実社会との連携を深め、実践的な学びの機会を拡充していくことも大切である。さらに、グローバル化に対応するため、英語をはじめとする外国語教育の強化と、異文化理解教育を推進していく必要がある。また、SDGs 達成に向けた教育を導入し、環境問題や社会問題に対する意識を高めていかなければならない。教員の役割も変化し、児童の成長をサポートするファシリテーターとして、新たな指導法や ICT 活用を学び続け、成長していかなければならない。GIGA スクール構想により、児童一人ひとりがタブレットを活用した個別学習やプログラミングに取り組む環境が整った。グループワークでは、リアルタイムな情報共有を通じ、協働的な学びが促進され、多様な評価方法により、児童の成長を多角的に捉え、きめ細やかな指導へと繋がっている。

今後も、保護者や地域社会との連携を強化し、ともに子供たちの成長を支えながら、学校教育目標である「ふるさとを愛し、夢を育む、賢く優しくたくましい子ども」の育成を目指します。一人ひとりの心の成長を支え、自ら考え、学び、成長できる学校づくりを推進してまいります。